プレ・ローマ期キュレネの有力家族とリビア人

岡田泰介

はじめに

テラの植民者たちが前七世紀後半に北アフリカ東部のキュレナイカ地方に築いた植民市キュレネの国制は、前五世紀の半ばの王政崩壊以降しばしば党派抗争を経験しつつも、寡頭的体制の根強い存続によって特徴づけることができる。[1] キュレネ史におけるこのような寡頭政的傾向は、バットス王朝期に関する古典的研究を著したChamouxによってつとに注目されていたが、その後、第二次大戦以降のキュレネ考古学の巨頭Stucchiと、とりわけChamouxの門下で学んだLarondeによる、プロソポグラフィックな手法を駆使した緻密な研究によって、その詳細が明らかにされつつある。[2]

他方、Gasperiniは、キュレネの公職者にリビア系とみられる名がしばしば見いだされることを指摘している。[3] キュレナイカのギリシア語史料に残るリビコ・ベルベル系人名に関しては、言語学者であるMassonによって一九六〇年代以来サンプルの抽出と収集が進められてきた。[4] 前二千年紀を通じて、数波にわたって北アフリカ・サハラ地方に浸透したベルベル人は、テラ人の到来時にはすでに、ヘロドトスをはじめとするギリシア・ラテン語史料に名をとどめる幾つかの部族集団を形成してキュレナイカ地域に確固たる地歩を固めていた。これらのリビア系諸部族とギリシア系植民市との関係は、敵対と共存の曲折を経つつ、七世紀におけるアラブ人の侵入にいたるまで古典古代キュレナイカ史の展開軸の一つをなしたのである。[5] しかしながら、ギリシア系植民市における対先住民関係を扱おうとする研究者がしばしば遭遇する問題であるが、文献や碑文に残された知見は政治的・軍事的な輪郭をとどめるにすぎない場合がほとんどであり、社会・経済面での交渉の詳細をうかがうことは容易でない。こうした史料的制約を補う意味で、Masson等によって蓄積されたリビコ・ベルベル系人名に関するデータ・ベースの、情報源としての有効性が期待されることになる。

本稿は、Larondeの諸研究と、近年Fraser等によって編纂されたキュレナイカ人名辞典に基づくプロソポグラフィックなデータに依拠しながら、キュレネの寡頭政を支えた社会層とリビ

ア人との、これまで十分に注目されてこなかった関係の一端に光を当て、プレ・ローマ期キュレネ史におけるその意義を明らかにしようとする試みである。[6] なお、人名データ、特に公職者のデータが前四世紀前後に偏在しているため、本稿での検討はとりあえずこの時期を中心とした共時的な視角から行われる。

一

(一)

キュレネの寡頭政とはどのような具体相を持つものだったのだろうか。まず目を引くのは、ポリスの主要な公職において、比較的限られた数の家族集団が高い比重を占めていたとみられることである。

前四世紀に存在が確認されているキュレネの公職としては、エフォロイ、ノモフュラケス、ノモテタイ、デーミウルゴイ、アポロン神官、テレスフォロイの他に、ストラテゴイ、四頭立て戦車隊長（λοχαγὸς τεθρίππων）、一頭立て戦車隊長（λοχαγὸς μονίππων）、歩兵隊長（λοχαγὸς πεζῶν）、ペルタスタイの隊長（λοχαγὸς πελταστῶν）、三百人隊長（τριακατιάρχας）という一連の軍事的な公職が挙げられる。キュレネのエフォロイ職は、おそらくテラを経由してスパルタに起原を持つもので、王政期には王の司法権の一部を管掌していたが、前六世紀のデモナクスの改革以降国家の最高役人となった。ノモフュラケスとストラテゴイは、デモナクス改革に際して、エフォロイと共に、従来王に属した政務・司法・軍事の権限を継承してあらたに設置された公職である。デーミウルゴイは、前五世紀中頃の王政崩壊後に王のテメノスがアポロン神殿領としてポリスの管轄下に移されると共に、その管理・運営を司るようになった公職である。キュレネの紀年の公職であるアポロン神官は、やはり王政崩壊後に王の祭祀権を継承したものとみられる。テレスフォロイは、王政期にさかのぼるアポロンの祭儀であるテレスフォリア祭に関係する神官であったらしい。[7]

具体例として、ここでは、エフォロイ、ノモフュラケス、デーミウルゴイ、アポロン神官、ストラテゴイという主要な五つの公職について検討を加えてみよう。検討方法としては、前四世紀の人名サンプル全体の中で、当該公職者またはその父親と同名の人物が、上掲のいずれかの公職にある確率を算定した。小数点以下は四捨五入した。前四世紀においてエフォロイは四名が知られており、同じく前四世紀に属する同名の人物のうち五四％が公職者であった。また、エフォロイの父親と同名の人物のうち六七％が同様に公職者であった。ノモフュラケスは九名で、同名の人物のうち三四％が公職者であり、父親の場合は二％であった。デーミウルゴイは二一名が検出され、本人および父親の同名人物の公職在任率はそれぞれ三五％、二一％であった。アポロン神官は一三名が知られており、本人および父親の同名人の公職在任率は共に三二％であった。ストラテゴイは二五名、本人および父親の同名人の公職在任率は二三％、三一％であった。したがって、かつての王の権限を継承した高位公職者に関していえば、同名の人物が同種の公職あるいは上記五つの主要な軍事的公職にある確率は平均三六％、その父親の場合は三一％であった。この検討結果は、キュレネの公職が一定範囲の名の保持者に

よって集中的に担われていたことを示している。

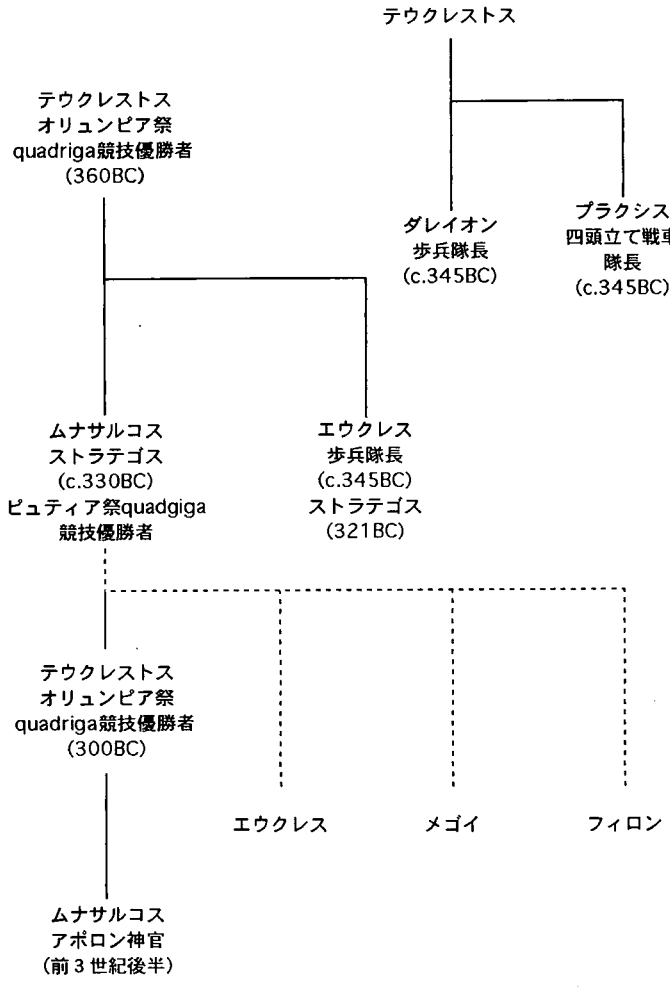
こうした特定の人名グループによる公職寡占状態は、サンプルの年代と出現頻度を基礎として個々の人名を相互に関連づけ、家族・親族関係の復元を試みることによって、幾つかの名を指標とする家族集団によるポリス支配の一断面としての様相をあらわしてくる。ここでは、碑文や文献からだけでなく、考古学的にもその実態をうかがうことのできるムナサルコス家のケースをとりあげる。シュルティス湾岸のリビア系部族マカイとナサモネスに対する前三三〇年頃の戦勝記念碑に名を連ねるストラテゴイの一人として、テウクレストスの子ムナサルコスという人物が知られているが[8]、彼の父親であるテウクレストスはパウサニアスが前三〇〇年のオリュンピア祭における quadriga 競技の優勝者として言及している同名の人物の祖父であり、ストラテゴスたる彼自身はこの人物の父親と思われる。祖父のテウクレストスは前三六〇年頃、やりはオリュンピア祭の quadriga 競技に優勝した人物と考えられ、ストラテゴスのムナサルコス自身もピュティア祭の quadriga 競技に優勝した経験を持っていた[9]。また、前三四五年頃には歩兵隊長として、前三二一年に公布された *Diagramma* にストラテゴスとして姿を見せるテウクレストスの子エウクレスは、前三六〇年の quadriga 競技の優勝者であったテウクレストスの子であり、ストラテゴスたるムナサルコスの兄弟ではないかと考えられている[10]。前三世紀後半には、アポロン神官職にあったテウクレストスの子ムナサルコスという者が知られていて、彼はストラテゴスであったムナサルコスの孫であるらしい[11]。

さらに、キュレネの北のネクロポリスでは、ムナサルコスという名が頻出する七つの墓碑銘を伴う家族墓が発見されている[12]。台地崖に掘り込まれたヒュポガイア式の墳墓であるこの墓所は、その規模の大きさの点で、広大なキュレネのネクロポリスの中で他を圧している。墳墓全体の幅は一四・八五メートル、ファサードには三段のクレピスの上に両翼に埋め込まれた二本を含む高さ四・三三メートルの八本の円柱を持つ。この円柱が支えるトリグリュフォスとメトペを含む全体の高さは七・六〇メートルである。ファサードの奥行きは三・一八メートルあり、前面の壁には墓室へ通じる三つの開口部がもうけられている[13]。墓碑銘のうち最も古いのはテウクレストスの子ムナサルコスのもので、この人物は前出のストラテゴスか、あるいはアポロン神官と同一人物と考えられている[14]。年代的にやや下って、いずれもムナサルコスという父親名を持つエウクレス、テウクレストス、メゴイ、フィロンという四名の墓碑銘が続く。彼らは、ストラテゴスまたはアポロン神官のムナサルコスの子供たちとみられる[15]。

以上をムナサルコス家の中核的なメンバーとすれば、その周辺にはさらに、この家の親族と目される人々が蝟集している。ムナサルコスという名をめぐっては、*Diagramma* に現れるストラテゴイの一人としてムナサルコスの子カリス、前五世紀末の軍事的公職者としてムナサルコスの子クレウゲネスという人物が知られている[16]。テウクレストスという名との関連では、前四世紀中葉の軍事的公職者の一人としてメラニッポスの子テウクレストス、同じ史料中にやはり軍事的公職者としてテウクレストスの子カルニス、前三四五年

頃の歩兵隊長としてテウクレストスの子ダレイオン、同じ史料中に四頭立て戦車隊長としてテウクレストスの子プラクシス、前三三〇年頃のストラテゴスとしてポリュティモスの子テウクレストス、そして前四世紀のデーミウルゴスとしてテウクレストスといった人々が挙げられる。[17] ダレイオンとプラクシスは同世代に属する人物であったらしいので、おそらく兄弟である（系図一）。

ムナサルコス家は、キュレネの有力家族集団の権力の特徴を端的に示している。その系譜は前四世紀半ばから前三世紀半ばまで三〜



系図１

cf. Laronde, A. *Cyrène et la Libye hellénistique*: *Libykai Historiai*. Paris 1987, p.58

四世代、ほぼ百年にわたっている。彼らはおそらく二世代にわたってストラテゴス、アポロン神官というポリスの高位公職者を輩出させ、歩兵隊長からストラテゴスまで軍歴を登り詰めたテウクレストスの子エウクレスの例にみられるように、とりわけ軍事的公職において重要な役割を果たしていたとみられる。この一族には軍職に就いた者が多い。また、彼らは代々ウマと戦車の扱いに長けていた。さらに、彼らは、三世代にわたってオリュンピア祭・ピュティア祭の quadriga 競技に出場し、豪壮な墓所を営むにたる巨大な財力の持ち主でもあった。

(二)

ムナサルコス家の例が示すように、ポリスの軍事部門における卓越した役割は、キュレネの有力家族の重要な権力基盤の一つとなっていた。これには、リビア系諸部族と境を接する植民市キュレネが置かれていた、独自の軍事的環境が関係していたものと思われる。

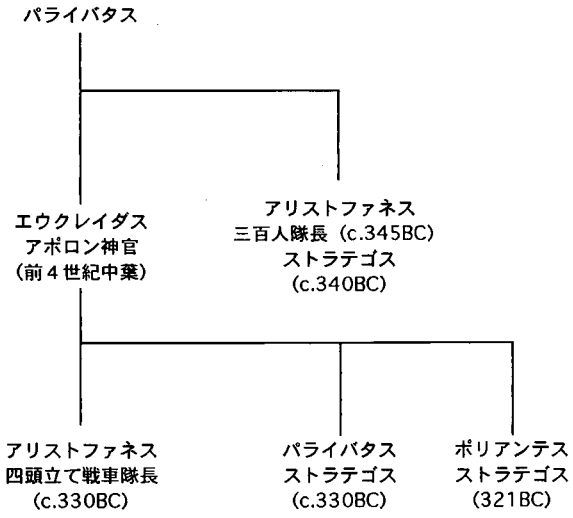
前六世紀半ば、アルケシラオス二世麾下のキュレネ軍がリビア人に大敗を喫し、重装歩兵七〇〇〇を喪うという事件が起こった。[18] このエピソードは、前四世紀キュレネの軍制の特徴を理解する上で示唆的である。なぜなら、クセルクセスの遠征軍に参加したリビア人部隊に関するヘロドトスの記事によれば、リビア人は軽装歩兵と戦車を主力とする軍事編成をとっていたのであり、[19] 鈍重な重装歩兵からなるキュレネ軍は高い機動性を持つリビア軍を捕捉することができず、逆に戦列の側面が暴露されざるを得ないキュレナイカ内陸部の広大なステップへ誘い込まれて包囲殲滅されたと推定できるからである。ギリシア本土では威力を発揮した重装歩兵戦術は、キュレナイカの大平原を舞台とするリビア人との戦いには有効でなかったのである。

前四世紀のキュレネ軍の編成には、おそらくこうした戦訓が投影されている。当時のキュレネの軍制における伝統的な重装歩兵部隊のウエートは、同時代のギリシア諸国に比べて相対的に低くなっていたらしい。前四世紀後半に起こったティブロンのキュレナイカ侵入に際して、キュレネ軍は二度にわたってティブロン軍に大敗を喫した。この事実は、キュレネ軍の重装歩兵部隊が比較的弱体であったことをうかがわせる。というのは、タイナロンなどで徴募されたギリシア人傭兵からなるティブロン軍は、おそらく古典期よりも軽装備になっていたとはいえ、重装歩兵を主力としていたと考えられるからである。[20] これに対して、キュレネの軍隊の中核をなしたのは、騎兵や戦車、軽装歩兵などの機動力の高い兵種であったらしい。そのことをうかがわせるのは、一連の軍事的公職者の名簿である。名簿の頂点にストラテゴイが位置していることからみて、以下に続く名簿上の序列は、それぞれの軍事的公職のキュレネ軍における序列に対応しているものと思われる。ストラテゴイに次ぐのは、まず四頭立て戦車隊長で、以下一頭立て戦車隊長、三百人隊長、歩兵隊長、三百人隊と共に戦うペルタスタイの隊長、投槍兵（ἀκοντιοταί）の隊長、四頭立て戦車隊と共に戦うペルタスタイの隊長、戦車搭乗戦闘員（παραβάται）の隊長と続く。[21] キュレネにおける三百人隊とは、ヘシュキオスによればエフェーボイ部隊であった。[22] 彼らは戦車隊とは区別されているが、四頭立て戦車隊と同様に軽装歩兵であ

るペルタスタイと組み合わされているので、おそらく歩兵ではなく、軽装兵の支援を受けた騎兵部隊だったのであろう。騎兵隊に *ἵππι*- *ποι* あるいは *ἱπποδρόμοι φιλοί* と呼ばれる軽装兵を組み合わせた編成の事例は、前五～四世紀にはギリシア各地にみられる。[23] 前三〇八年のオフェラースによるカルタゴ遠征には六〇〇の騎兵が参加した。[24]

キュレネの軍制にみられる最大の特徴は、戦車が軍事的重要性を失っていないことである。多くのギリシア諸国において戦車が軍事的には全く意義を失い、騎兵にとってかわられていた前四世紀という時期に、キュレネ人が依然として戦車を実戦に使用していたことは、複数の同時代史料によって確認できる。ディオドロスによれば、ティブロンは講和条件の一つとして戦車部隊の提供を要求しており、オフェラースのカルタゴ遠征軍には一〇〇台の戦車が従軍していた。[25] クセノフォンは、キュレネにおける戦車の運用方法を「かつてトロイア人のものであった戦車術（*τὴν……Τρωικὴν διφρείαν πρόσθεν οὖσαν*）」と類似のものであるとしている。[26] 古典期のギリシア人がイメージしたホメロス時代の戦車の運用法とは、エジプトやヒッタイトなどのオリエント諸国におけるそれとは違って車上から弓矢や槍で戦うものではなく、戦車は単に兵士を戦場まで運ぶ、または撤退の際や負傷の際に兵士を戦場から離脱させるための輸送手段でしかなかった。[27] この点は、アイネイアスの記事によって裏付けられる。それによれば、キュレネ人は戦車に重装歩兵を搭乗させて戦場まで運び、この重装歩兵は戦場に着くと戦車から降りて戦った。[28] また、兵士が負傷すると、再び戦車に乗せて後方へ運び去ったという。[29] 同じくアイネイアスによれば、これらの戦車部隊の行動をさらに容易にするために、車行の可能な道路網の整備が進んでいたらしい。かつてキュレネ領が広がっていたアフダル山地一帯では、今日なお、轍によってそれと識別できる古代の道路の痕跡が縦横に走っているのが観察される。轍の幅がほぼ一定していることは、それらが車両交通の便宜をはかって意図的に掘り込まれたものであることを示しており、車両交通を前提とする道路インフラストラクチャーの存在をうかがわせる。[30] こうした考古学的知見は、アイネイアスの記事と符合している。したがって、キュレネの戦車隊とは、一～二頭または四頭のウマに牽かせた戦車に重装歩兵を搭載して高い機動力を持たせた兵種であった。全体の兵力は不明だが、オフェラース麾下の一〇〇台の戦車に乗り組んだ兵士は三〇〇人であったとされており、御者を除けば重装歩兵の兵力は二〇〇人と推定できる。[31] 軍事的公職者名簿の中で四頭立て戦車隊長と一頭立て戦車隊長はストラテゴイに次ぐ序列を占めており、戦車隊がキュレネの軍制の中で極めて重視されていたことが分かる。また、クセノフォンは戦車隊を構成した兵士がキュレネ軍の最精鋭であったことを示唆している。[32]

このようにキュレネ軍の中核というべき存在であった戦車隊は、ムナサルコス家に代表される有力な家族集団の強い影響下に置かれていたらしい。上述のように、ムナサルコス家の一族には、四頭立て戦車隊長の地位にあるテウクレストスの子プラクシスという人物が見られた。また、前四世紀の四人の一頭立て戦車隊長の一人であるストラトンの父親名カルニスは、ほぼ同じ時期の軍事的公職者名簿に現れるテウクレストスの子カルニスという人物を通じて、ムナ



系図２
cf. Laronde, op. cit., p.118

サルコス家に特徴的な名であるテウクレストスに関係している。[33] 戦車隊指揮官職と有力家族集団との類似の関係は、前三三〇年頃四頭立て戦車隊長の地位にあったエウクレイダスの子アリストファネスに関しても指摘することができる。[34] 彼の父親名エウクレイダスは前四世紀には五例が知られているが、そのうちアリストファネスの父親を含む三例は年代がほぼ一致している。すなわち、アリストファネスの名が刻されている同じ碑文にはエウクレイダスの子パライバタスという人物が、また、*Diagramma* にはエウクレイダスの子ポリアンテスという人物が、いずれもストラテゴスとして現れる。Laronde はこの三名を兄弟とみる。[35] エウクレイダスの子パライバタスに関連しては、前四世紀にパライバタスの子エウクレイダスというアポロン神官が知られている。この二つの名の組み合わせには類例がないので、Laronde が字体から想定するようにアポロン神官を前四世紀の中葉におくならば、パライバタス・エウクレイダス・パライバタスという直系の親族関係が復元できる。[36] さらに、パライバタス、アリストファネスという二つの名からは、前三四五年頃には三百人隊長の職にあり、前三四〇年頃にストラテゲイオンを奉納した三名のストラテゴイの一人として姿を見せるパライバタスの子アリストファネスという人物との関連が浮かび上がってくる。彼はアポロン神官のエウクレイダスとほぼ同世代の人々であり、その兄弟であった可能性が考えられる（系図二）。[37] 前四世紀における一七名の四頭立て戦車隊長のうち、本人または父親の名が、アポロン神官からデーミウルゴイにいたる高位公職者の名と一致する事例は八例、一頭立て戦車隊長の場合は四例中一例であった。これらの

知見は、戦車隊指揮官がポリスの高位公職者と重複する母集団から供給されていたことを示している。

戦車とキュレネの有力家族との関係は、さらに、オリュンピア祭の quadriga 競技におけるキュレネ人優勝者の顔ぶれからも明らかである。その典型というべきなのが、父祖三代にわたってオリュンピア祭、ピュティア祭での優勝者を輩出させたムナサルコス家である、前四世紀には、他に二名のキュレネ人がオリュンピア祭 quadriga 競技優勝者として知られているが、そのうち前三八八年の優勝者と思われるアンニケリスを中心とするグループもまた、次章で詳しく述べるように、ムナサルコス家に類する特徴を備えた家族集団であったと思われる。前三六四年の quadriga 競技優勝者であり、前四〇八年のスタディオン競技の優勝者と同一人物とみられるエウバタスという名の事例は、前四世紀には四例のみであるため、前三四五年頃の三百人隊長であるエウバタスの子ヘーリロコスはオリュンピア祭優勝者の息子であったかもしれない。[38]

二

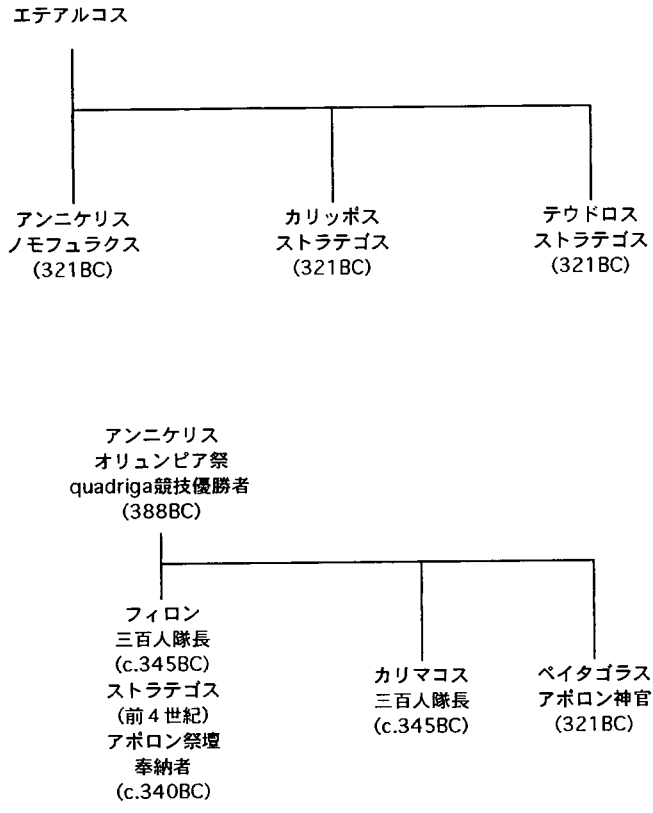
(一)

現存するキュレネの公職者の間にリビコ・ベルベル系の名を持つ者がみられることは、キュレネの公職において大きなウエートを占めた諸家族とキュレネ領内外に住むリビア系住民との間に何らかの結びつきが存在したことをうかがわせる。

前四世紀の史料から抽出される七例のリビア名のうち、史料的に最も恵まれているのは、アンニケリス（Ἀννικέρις）のケースである。[39] キュレナイカにおいてのみ知られているこの名の事例総数は一二、うち七例が前四世紀に属しており、そのうち六例が高位公職者またはその父親であった。この名の保持者の中で最も著名なのは、前出の前三八八年のオリュンピア祭における quadriga 競技の優勝者と目される人物である。彼は、プラトンがシケリアからの帰路アイギナで奴隷として売却されかかった際に、二〇または三〇ムナの身代金を支払ってプラトンを救ったとされる。[40] 自分の戦車の轍を踏み外すことなくアカデメイアの周囲を何度も回るという絶妙の戦車操縦術を誇ってプラトンにたしなめられたキュレネ人アンニケリスは、同一人物とみられる。[41] アイギナにおけるプラトンの遭難にまつわるエピソードの信憑性を疑問視する見解もあるが、いずれにせよ、プラトンを救ったキュレネ人アンニケリスのモデルとなった人物が実在したことは確実と思われる。[42] これらの史料からイメージすることができるのは、テウクレストスの子ムナサルコスと同じく、富裕で、ウマと戦車の扱いに熟練したキュレネ貴族の典型的な人物像である。残念ながらこのアンニケリスの父親名は知られていないので、彼をめぐる家系復元の試みには不確実な要素が残らざるを得ない。にもかかわらず、アンニケリスという名の稀少性と年代的な近接性をもとに、かなりの蓋然性をもって彼を中心とする家族集団の全貌をうかがうことができる。前四世紀に再建されたアポロン神殿の前門のまぐさ石であったらしい奉納碑に名を残している三名のストラテゴスの一人として、アンニケリスの子フィロンという人物が現れる。[43] この名は前四世紀には他に二例が知られている。まず、

前三四五年頃に位置づけられる軍事的公職者名簿には、いずれもアンニケリスの子であるカリマコスとフィロンという二人の三百人隊長が現れる。後者はおそらく上述のストラテゴスと同一人物である。彼らが兄弟であった可能性は極めて高いが、さらに年代的にみて、この二人をオリュンピア祭優勝者の息子とみる Laronde の推定は魅力的である。[44] また、前三四〇年頃に大規模な修復が施されたアポロンの祭壇に刻まれた奉納碑文は、この祭壇の修復者がアンニケリスの子フィロンという人物であったことをうたっている。本人ならびに父親の名が共に一致していること、および年代的な近接性から、彼はおそらく上述の三百人隊長と同一人物である。彼が修復した祭壇はキュレネ中心市の西端にあるアポロン神殿の東側正面に位置しており、長さ二二・〇八メートル、幅四・九四メートル、高さ一・九三メートルに達する巨大な構造物である。フィロンによる修復は、アルカイック期にさかのぼる現地産石灰岩製の祭壇の規模そのものには変更を加えず、祭壇の全面をパロス産の上質の大理石製化粧板によって覆ったものであった。[45] 近隣に大理石を産出しないキュレネは、彫刻や建築用材としての大理石を全て海外からの輸入に依存していたので、[46] パロスからの輸送コストに加えて、標高五〇〇メートル近い台地の中腹に位置する中心市まで石材を運び上げる経費を考えれば、この祭壇修復事業は施主であるフィロンの財力をあますところなく物語っている。[47] さらに、*Diagramma* には、アンニケリスの子ペイタゴラスというアポロン神官が姿を見せている。[48] アポロン神官への就任年齢が五〇歳以上であったこと、およびアンニケリスの二人の息子フィロンとカリマコスが三百人隊長であった時期から二四年程度隔たっていることを考慮すると、この三名はほぼ同世代に属するとみられるので、彼らはオリュンピア祭優勝者を父とする兄弟であろう。前四世紀におけるフィロンという名の事例は少なくとも一四例で、[50] この世紀の半ば以降、四頭立て戦車隊長、[49] ストラテゴイ、[51] ノモフュラケス[52] などの公職に関係して現れる他に、アルテミスに対して一二〇頭に上るウシの供犠を行ったヘルメサンドロスの父親としても知られる。[53] また、上述のように、ムナサルコス家の墓所の被葬者にもこの名を持つ者がある。*Diagramma* には、エテアルコスの子アンニケリスという人物がノモフュラクスとして姿を見せている。[54] エテアルコスという名の前四世紀の事例は四例で、そのうちアンニケリスの父を含む三例が *Diagramma* に現れる。すなわち、いずれもストラテゴスであるエテアルコスの子カリッポス、テウドロスの二人である。[55] ノモフュラクスの就任年齢が何歳だったかは碑文の欠損のために分からないが、他の公職同様五〇歳であったとすれば、エテアルコスの子アンニケリス、カリッポス、テウドロスの三名はいずれも同世代に属する人々と考えられ、兄弟であった可能性が高い（系図三）。

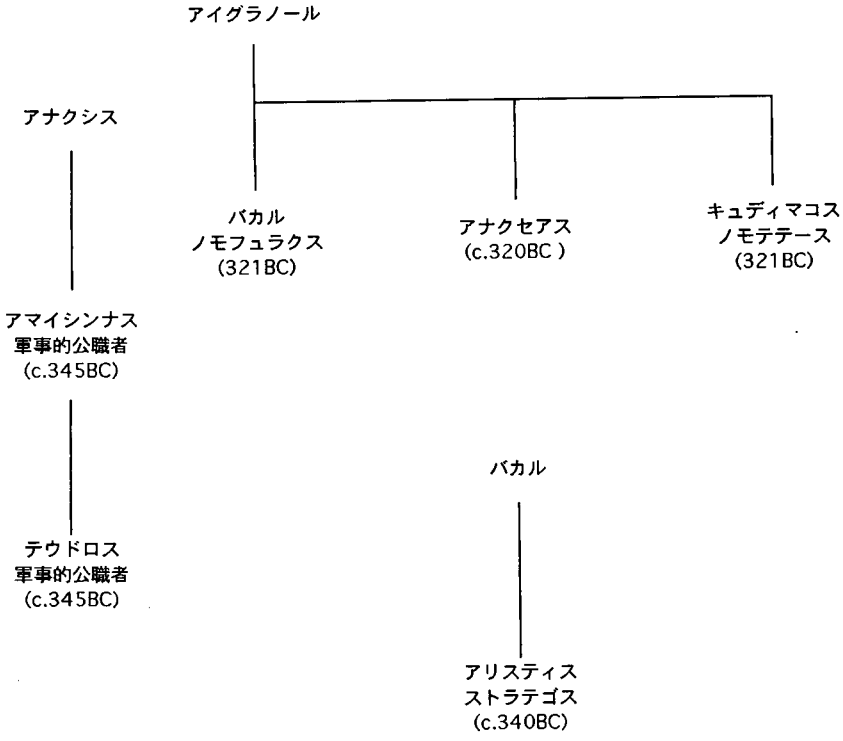
アンニケリスに次いで比較的史料に恵まれているのは、バカル（*Bakal*）というリビア名である。[56] この名は前四世紀には三例が知られている。*Diagramma* には、ノモフュラクスとしてアイグラノールの子バカルという者が現れる。[57] 彼は、おそらく、デメテル神殿出土の前三二〇年頃の奉納像台座に奉納者として名を残している人物である。ちなみに、この台座には彼と共にアイグラノールの子アナクセアスという人物が現れるが、Stucchi は彼をバカルの兄弟



系図 3
cf. Laronde, op. cit., pp.118-119

とみなし、さらに、アフロディテへの大理石製テーブルの奉納者である同名の人物と同一視している。[58] *Diagramma* に現れるノモテタイの一人アイグラノールの子キュディマコスは、アイグラノールの子バカルの兄弟であろう。[59] また、この二人を結ぶアイグラノールという名の保持者には、後に触れるように、前一世紀のプトレマイオス朝の廷臣であり、キュレネの名門出身の人物でもあったデメトリオスの子アイグラノールがいる。[60] 前四世紀の事例としては、他に、上述のパライバタスの子アリストファネスと共にストラテゲイオンを建立したストラテゴイの一人として、バカルの子アリスティスという人物が知られている（系図四）。[61]

アマイシンナス（*Αμαισσνας*）という名は、前三四五年頃の同一碑文上にアマイシンナスの子テウドロス、アナクシスの子アマイシンナスという二例が検出される。いずれも



系図 5

系図 4

cf. Stucchi, S. *Architettura cirenaica*. Roma 1975, p.90, n.3

何らかの軍事的公職者である。[62] 年代的な近接性、アマイシンナスという名の事例の少なさから判断して、アナクシス・アマイシンナス・テウドロスという直系の親族関係が復元できると思われる。テウドロスという名は前四世紀には七例が知られ、そのうち二人は世紀中葉の名簿に軍事的公職者として現れる。[63] *Diagramma* には、ストラテゴスとしてテウドロスの子アリンマス、[64] エテアルコスの子テウドロスという二例がみられ、そのうちエテアルコスの子は、すでに述べたように、エテアルコスの子アンニケリスとの兄弟関係が想定される人物である(系図五)。

残る四つのリビア名は、いずれも、前四世紀には一つづつの事例を数えるにすぎない。タバルビス (*Ταβαλβις*) という名に関しては、前四世紀のデーミウルゴスとしてタバルビスの子ニコストラトスという事例がある。[65] 関連名ニコストラトスには類例がない。一九一〇～一九一一年

のアメリカ隊による調査の過程で発見された、軍事的公職者名簿と思われる碑文断片に現れるセメル（Σεμρο）というリビア名は、前四世紀にはこの一例のみで、父親名を欠いている。[66] 前三三〇年頃の四頭立て戦車隊長として現れるアイアモナン（Αιαμοναν）もまた父親名を欠いているため、人的関連を復元することは困難である。[67] 前三四五年頃の軍事的公職者名簿に現れるギロン（Γιλων）の子エムペドクレスもまた類例がない。[68]

以上の検討から、その構成員にリビア名が検出されるアンニケリス家をはじめとする家族集団が、キュレネの寡頭体制を担った、ムナサルコス家を代表とする有力家族と同一の社会層に属していたことは明らかである。このことは、キュレネの市民団、それも前四世紀前後のキュレネにおいてとりわけ指導的な地位にあった幾つかの有力家族集団へのリビア的要素の浸透を示唆する。このような現象について Laronde は、親子ともリビア名を持つ例は稀であることからリビア人の市民団への浸透は想定できない。ゆえにリビア系人名の存在は混血か、あるいは単なる文化的な影響を示すにすぎないとみる。同様に Reynolds は、リビア系人名自体からその人名の保持者のエスニック・オリジンを読みとることはできず、単にリビア人からの何らかの影響をうかがうことができるのみとしている。[69] 確かに、人名にはさまざまな文化的バイアスがかかる場合があるため、直接に保持者のエスニック・オリジンを示すとは限らない。[70] しかしながら、ギリシア人と非ギリシア人が接触した場合、非ギリシア人にはギリシア名を採用する傾向が強いのに対して、その逆が稀であったことは一般に認められており、[71] そのような全般的傾向の中で、キュレネ市民団の中核ともいうべき階層に少なからぬリビコ・ベルベル系人名が検出されるとすれば、それはギリシア人側の異国趣味として片づけられる問題ではなかろう。ギリシア名の中に散在するリビア名は氷山の一角であり、水面下にはギリシア名に隠されているものをも含めて、かなり広範なリビア系の血統が存在していたのではなかろうか。このような観点からすれば、親子とも非ギリシア名を持つケースおよび親が非ギリシア名で子がギリシア名を持つケースは、ギリシア化した非ギリシア系家族を、逆に親がギリシア名、子が非ギリシア名を持つケースは、家族内における非ギリシア的伝統の存続または非ギリシア人と混血したギリシア系家族を示すとする Gasperini の指針は妥当なものといえよう。[72]

アンニケリスという名は、オリュンピア祭優勝者の場合のように三名のギリシア名の子の父親名として現れる一方、前三二一年のストラテゴスであったエテアルコスの子アンニケリスのように、ギリシア名の父親を持つケースもみられる。また、エテアルコスの子アンニケリスの二人の兄弟はいずれもカリッポス、テウドロスというギリシア名を持っている。同様に、バカルはノモフュラクスであったアイグラノールの子のようにギリシア名の父親と、やはりギリシア名の兄弟アナクセアス、キュディマコスを持つケースがある一方、ストラテゲイオンの奉納者アリスティスというギリシア名の人物の父親としても現れる。アナクシスの子アマイシンナスの場合は、直系親族内でギリシア名とリビア名が交互に現れている。こうした知見は、これらの家族集団とリビア人との、混血を含む複雑な混淆プロセスが進行していたことを物語る。あまつさえ、そのいずれかが

ギリシア化したリビア系の家族であった可能性も否定はできないのである。

がんらい、キュレネの市民団は古典期のアテナイほどの閉鎖性を持っていなかった。*Diagramma* 冒頭の市民資格に関する条項は、大シュルティス湾からソルム湾にいたる広義のキュレナイカ在住のリビア人女性とキュレネ人男性の間に生まれた混血児が、キュレネ市民権を取得し得ることを明記している。[73] さらに、キュレネの有力家族がしばしばリビア人との間に人的なパイプを持っていたらしいことも、このような密接な血縁関係の存在を前提とすれば理解しやすい。オリュンピア祭優勝者のムナサルコスの子テウクレストスは、パウサニアスがオリュンピアで目にした奉納物の銘文によれば、「リビア人の習わしにしたがって（*κατὰ τὸ ἐπιχώριον τοῖς Λιβύαις*）」ウマを飼養した人であった。[74] また、時代は下るが、前一世紀のデメトリオスの子アイグラノールとその娘のアレタフィラーの事例は、この点に関連して興味深い。[75] プルタルコスによれば、アレタフィラーはその夫と共に「高貴な人々（*γνωρίμων ἀνδρῶν*）」であったが、[76] 僭主としてキュレネの実権を握ったニコクラテスは夫を殺害して彼女を妻とした。アレタフィラーはまずニコクラテスの弟のレアンドロスを使嗾して[77] ニコクラテスを殺害させ、次いでリビア人の有力者（*δυνάστης*）であるアナブスと謀ってレアンドロスを倒し、キュレネを僭主政から解放した。アレタフィラーはこの過程で、アナブスと緊密に連絡をとりあってことを運んだ。彼女はまずアナブスを説いてキュレネ領を劫略させる。[78] そして、レアンドロスに対しては自らアナブスとの間に立って仲介役をつとめることを申し出るが、その実、会談の場でレアンドロスを捕らえるよう、密かにアナブスに依頼しているのである。[79] アレタフィラーのこうした一連の動きは、彼女がかねてからアナブスと知己であったこと、および彼女がリビア人社会との間にそのようなパイプを持っていることはレアンドロスとその周囲の人々にとっては周知の事実であったことを示している。そのことは、さらに、彼女の父親とみられるアイグラノールが、キュレネをはじめとする植民諸市とならんで「コーラの諸エトノス（*τὰ κατὰ τὴν χώραν ἔθνεα*）」に対する貢献によって顕彰されている事実と符合する。プトレマイオス朝支配下のキュレナイカは、ギリシア系植民市（*πόλεις*）とそれ以外の地域（*χώρα*）からなるものと観念されていた。[80] そして、この場合の *χώρα* とは、ギリシア系植民諸市とは別個の政治勢力であったリビア系諸部族の活動圏を指している。したがって、この顕彰碑文は、アイグラノールが、ギリシア系諸市のみならずリビア系諸部族に対しても、何らかのつながりを持っていたことを暗示している。アイグラノールという名は、上述のように、前四世紀にはバカルというリビア名と関係しており、アイグラノールの一族は、おそらく通婚を含むさまざまな経緯でリビア系諸部族と結びついていたものと推測される。

(二)

ウマと戦車が、軍事的な側面でもオリュンピア祭の quadriga 競技に象徴される威信の面でも、キュレネの有力家族集団による支配を支える柱の一つとなっていたことはすでに述べた。そして、他

ならぬこのウマと戦車をめぐる側面にこそ、彼らとリビア人社会との関係が史料上とりわけ可視的な形で具現している。

ウマとそれに牽かせた戦車は、古代ベルベル社会を特徴づける最も重要な社会的・文化的ファクターであった。ベルベル人とウマ・戦車との結びつきは古く、サハラ・北アフリカへのウマと戦車の導入自体が、前二千年紀に始まるベルベル系諸族の浸透と密接に関連するものと考えられている。[81] それを雄弁に物語るのは、サハラ一帯で観察される多数のウマと戦車の岩面画である。こうした岩面画は戦前にも散発的にその存在が報告されていたが、一九五〇年代後半に Lhote 指揮下のフランス隊によるタッシリ・ナジェールの調査によって、はじめてその全容の一部が明らかにされた。[82] それ以来サンプル数は急速に増大し、一九八九年現在、ティベスティ山地以西のサハラにおいて約六五〇点が知られている。[83] その分布は、タッシリ・ナジェール遺跡に代表される中央山塊、アルジェリアとモロッコにまたがるアトラス山地、モーリタニアを中心とするサハラ西部地域に集中している。[84] 岩面画に表現された戦車の形式は多様であるが、二頭立て（biga）と四頭立て（quadriga）に大別することができる。biga が各地に広く分布しているのに対して、quadriga の分布はフェザン、アトラス山地など一部の地域に限定されており、サンプル数もはるかに少ない。

オリエントやギリシア・ローマの戦車と比較してこれらサハラ・北アフリカの戦車を際だたせる構造上の特徴は、特にその牽引法にある。オリエントの戦車やその系譜に連なるギリシアの戦車では、ウマによる牽引力は、車体に固定されたながえと、その先端に木釘などで垂直にとりつけられたくびきを経由して車輪に伝えられた。くびきはウマの肩に置かれたが、ウシと異なりウマにはくびきを安定させるだけの肩胛骨の突出がなかったので、腹帯と胸帯によって固定される必要があった。[85] サハラの戦車にもこの種の牽引法を採用している事例はみられるが、特に biga に一般的に観察される牽引法は、明らかにオリエント・ギリシア式のそれとは異なっている。Spruytte の実験によれば、このサハラ独特の牽引法は、ながえの先端にくびきではなく一種の横棒を接続し、それをさらにウマの頭に装着した特殊な牽引具にとりつけたものと推定されている。[86] この場合、横棒はウマの頭の下に位置することになる。biga の図においてしばしばウマの尾やたてがみが短く刈られていることは、この推定を裏付けるものと思われた。なぜなら、オリエント・ギリシア式の牽引法では手綱ははみからくびき上にとりつけられた導輪を経由して御者の手にいたるのに対して、サハラの牽引法では、はみから直接御者の手に通じる手綱が尾やたてがみに絡むおそれがあったと考えられるからである。[87] biga に比べて quadriga はサンプル数が少ないにもかかわらず、構造や牽引法が極めて多様性に富んでいた。例えば、ながえは一本の場合と二本の場合があり、ながえが二本の場合には、一本のくびきに四頭のウマを繋ぐケースと二本のくびきに二頭づつのウマを繋ぐケースがあった。このような多様性は、実験と改良の結果とみられる。[88]

新王国時代のラーメス二世の治世期にあたる前一二三〇年頃からエジプトの西部国境を脅かし始め、続くメレムプター、ラーメス三世の治世を通じてエジプト領への侵入を繰り返した Rebu（Lebu）、

Meshwesh などのリビコ・ベルベル系諸集団がすでにウマと戦車を使用していたことは、エジプトの史料から明らかである。[89] 特に、エジプト領に隣接していない Meshwesh が、前一一八七年にラーメス三世治下のエジプトに侵入した際に戦車を伴っていたことは、その段階までにウマと戦車の使用が北アフリカのかなり広い範囲に普及していたことを示す。したがって、ベルベル人によるウマと戦車の使用は、少なくとも前一三世紀、おそらくは前一五世紀にさかのぼる可能性が考えられる。[90] 戦車は、古典古代に入ってもベルベル人によって広く使用されていた。前五世紀には、キュレネに隣接する部族アスビュスタイは、リビア系諸部族の中で最も quadriga の操縦に長けていた。[91] 小シュルティス湾岸からチュニジアにかけて居住していたアウセイスとザウエケス、フェザンのガラマンテスなどの諸部族も戦車を使用していた。[92] クセルクセスのギリシア遠征に従軍したリビア人部隊もまた戦車を伴っていた。[93] 前三一〇～三〇七年のアガトクレスによるカルタゴ遠征当時、マグレブのリビア人は、彼に、五〇台から六〇〇〇台に上る quadriga と思われる戦車を提供した。[94]

ウマと戦車がリビコ・ベルベル人の社会の中で担っていた機能については、岩面画の発見以来幾つかの仮説が提起されてきた。Lhote は、中央山塊からモーリタニアにいたる戦車の岩面画の分布状況をもとに、サハラを縦断してニジェール川流域に達する、ウマに牽かせた戦車を交通手段とする交易ルートの存在を想定したが、これらの地域において観察される戦車像の大多数を占める biga の、オリエントやギリシアの戦車に比べても簡素で華奢な構造から、輸送目的での利用の可能性はほぼ否定された。[95] また、少なくとも biga に関する限り、明確に戦闘シーンを示している岩面画の事例が稀であること、ほとんどの場合乗員が一人であること、ウシによって牽引される事例がみられることなどを根拠に、実戦用の兵器としての機能もまた疑問視されている。[96] Camps は、ウマと戦車を伴ってサハラ・北アフリカに浸透してきたベルベル系諸集団が、少なくとも前四〇〇〇年頃からウシ牧畜とおそらく農耕に依存しつつ生活していた先住民と混合しつつ、その支配層を形成していった時代にさかのぼる、成層社会における貴族的エリート支配の象徴としてのウマと戦車の意味と機能を想定している。[97] 北アフリカでは、前四世紀を境に戦車は次第に騎兵と交代していくが、ヌミディアの諸王がウマの育成を重視したことは、ウマに一種の社会的差別化機能があったことをうかがわせる。[98] マグレブでは、一九世紀に至っても、ウマは戦闘、狩猟、レイディングなど部族の戦士エリートの活動に不可欠の要素として、威信の象徴となっていた。[99] ウマと戦車に貴族支配的社会のシンボルとしての意味を見いだそうとする Camps の見解は説得的である。古典古代のリビア系諸部族がある種の成層構造を持っていたことについては、文献史料からの示唆がある。近年 Chamoux がその史料的価値に着目したディオドロスの記事によれば、ナサモネス、アウスキサイ、マカイ、マルマリダイの部族集団は、農耕・定住的牧畜・遊動的牧畜という異なった生業形態を持つ分節から構成されており、最も遊動性の高い分節が政治的には最も優位にあり、定住的な農牧分節に対して軍事的な保護を与える代償として貢納を課していたことがうかがわれる。[100]

しかしながら、ウマと戦車がCampsの想定するような意味を担い得たことの根底には、やはり実際的な機能、特に軍事的な重要性が存在したであろうことは否定しがたい。前五～四世紀には、ガラマンテスおよびアガトクレスに味方したマグレブのリビア人がquadrigaを軍事的な目的に使用しており、戦車のタイプは不明だが、ザウエケスの場合も同様であった。また、上述のように、クセルクセスの遠征軍にはリビア人の戦車隊が参加していた。さらに、前三二二年にティブロンを捕らえたキュレナイカのリビア人はbigaを駆っていた。[101] したがって、古典古代においては、quadrigaのみならずbigaもまたしばしば実戦に使用されたとみられるのであり、より古い時代においても、quadriga、bigaを問わず戦車が実戦用の兵器としての機能を持っていた可能性は高い。そして、戦車のこうした軍事的重要性こそが、支配エリートの権威の象徴としての機能を強化したのではなかろうか。

キュレネにおいても、リビア人社会においても、支配エリートの政治的・軍事的基盤であり、威信の象徴であったウマと戦車はまた、それら二つの支配的集団を相互に結びつける触媒ともなっていた。ヘロドトスによれば、ギリシア人は「四頭のウマを繋ぐことをリビア人から学んだ（τέσσερας ἵππους συζευγνύναι παρὰ Λιβύων οἱ Ἕλληνες μεμαθήκασι）」とされる。[102] Chamouxは、パウサニアスがオリュンピア祭におけるquadriga競技の創始をキュレネ建設に先立つ前六八〇年頃としていることを根拠に、このヘロドトスの伝承を疑問視したが、岩面画に描かれた戦車の構造と牽引法に関するSpruytteの研究に鑑みれば、ヘロドトスのこの箇所がquadrigaの使用そのものではなく、サハラ・北アフリカのベルベル社会で発達した独特の牽引法を指していることは明らかである。[103] さらに、ムナサルコス家のテウクレストスはウマの飼養法をリビア人から学んだのであり、キュレネの有力家族における代表的なリビア名の持ち主であるアンニケリスもまた、オリュンピア祭quadriga競技優勝者にして戦車術の達人として知られた人物であった。他方、ギリシア人側からサハラ・北アフリカ系戦車文化への影響を示す痕跡として興味深いのは、一九七一年にタッシリ・ナジェールで発見されたquadrigaの図像である。[104] Müller-Karpeが指摘するように、後足で立ち上がった四頭のウマの様式は、四肢をほぼ水平に伸ばしたいわゆるflying gallopによって特徴づけられる伝統的なサハラ・北アフリカの戦車図とは全く異質であり、ヘリオス像に典型的にみられるギリシアのquadriga図との強い近縁性を感じさせる。この戦車図の年代は前四～三世紀と推定されている。[105]

おわりに

地中海沿岸各地にギリシア系植民市における対先住民関係が、それぞれの植民市のその後の発展に無視し得ぬ影響をおよぼしたこと、植民市の社会的・経済的構造の十全な理解が背後に広がる先住民世界とのかかわりを抜きにしては期待し得ないことは、近年ではかなり広範に承認されたコンセプトとなってきた。[106] 本稿もまた、こうした方向性に沿った基礎作業の一つとして位置づけることができる。Grahamは、一般論として、少なくともアルカイック期から古典期に関する限り、植民市そのものは市民団の閉鎖性を特徴とする純

粋にギリシア的性格を維持したのであり、土着住民との混淆は周縁部に限定されたとする。また、Chamoux はキュレネのギリシア人社会における種族的・文化的純粋性を強調している。[107] にもかかわらず、本稿における検討を通じてかいま見られた前四世紀キュレネの指導的諸家族の姿は、このような理解とは異なったものであった。彼らは、おそらく姻戚関係を基礎とするさまざまな経緯で近隣のリビア人社会、特にその支配的グループと緊密に結びつき、この絆帯を通じて後者から強い文化的影響を受けた。そして、このような双方の支配的グループ相互の接近と融合こそが、王政崩壊後のキュレネ史の底流をなした寡頭政的傾向を政治的・軍事的に支える重要な基盤となったのではなかろうか。その意味で、リビア人との混淆と相互影響は、地理的にも社会的にも、周縁どころか植民市キュレネのさらに中心というべき部分で生じ、キュレネの政治的・社会的のシステム形成上大きな規定要因の一つとなったということができよう。冒頭で述べたように、本稿では共時的な様態の析出に検討レベルを限定したため、こうした関係の形成と展開という動態的なプロセスの分析には踏み込むことができなかった。この点は今後の課題とされなければならない。

略記表記

Supplemento=Oliverio, G., G. Pugliese Caratelli, and D. Morelli. Supplemento epigrafico cirenaico. *ASAA* 39-40=NS 23-24 (1961-1962), pp. 219-375.

本稿における雑誌論文の略号は、*L'année philologique* に、史料の略号は Liddell, H. G. and R. Scott, eds. *A Greek-English Lexicon*. 9 ed., Oxford 1925-40 に準拠した。

注

(1) キュレネでは前四〇一年に政権を握った民主派が有力市民五〇〇人を殺害し、メッセニア人傭兵の支援を受けた寡頭派との間に激しい内戦を展開した後、両派の間に暫定的に和解が成立した。しかし、その後再び寡頭派の巻き返しがあり、キュレネがプトレマイオス朝の支配下に編入される直前には千人による寡頭政が形成されていた。前三二一年にプトレマイオス一世の *Diagramma* の下に成立した体制は、参政権を二〇〇〇ドラクマ以上の有産市民一万人に拡大した点を除けば、長老、評議会および一五〇〇人からなる法廷などの国家機構とその構成原理は、先行する寡頭体制を継承したものとみられている。D. S. 14. 34. Arist. Pol. 1319b. Bagnall, R. S. *The Administration of the Ptolemaic Possessions Outside Egypt*. Leiden 1976, pp. 28-29. Laronde, A. *Cyrène et la Libye hellénistique: Libykai Historiai*. Paris 1987, pp. 250-254.

(2) Chamoux, F. *Cyrène sous la monarchie des Battiades*. Paris 1953, p. 237. Stucchi, S. *Architettura cirenaica*. Roma 1975, p. 90, n. 3. Laronde, op. cit., pp. 53-58; 95-128.

(3) Gasperini, L. Echi della componente autoctona nella produzione epigrafica cirenaica. *QAL*12 (1987), p. 409.

(4) Masson, O. Quelles sont nos sources pour les noms d'hommes en libyque? *Semitica* 25 (1975), pp. 75-85. Id. Grecs et Libyens en Cyrénaïque, d'après les témoignages de l'épigraphie. *AntAfr* 10 (1976), pp. 49-62. サンプルはその後も次第に増大しつつある。Gasperini, op. cit., pp. 407-408.

(5) 文献、碑文中に散在する関係史料は Masson, (1976), pp. 49-53. および Gasperini, op. cit., pp. 403-406 に整理されている。

(6) Fraser, P. M. and E. Matthews. A *Lexicon of Greek Personal*

Names Vol. 1, Oxford 1987（以下 Fraser, A Lexicon と略記）

(7)　Chamoux, 1953, pp. 214-218; 310f. Applebaum, S. *Jews and Greeks in Ancient Cyrene*. Leiden 1979, p. 39.

(8)　SEG. 9. 77. この碑文は年代は従来前三世紀におかれてきたが、Laronde は、プトレマイオス朝がキュレネのこのような軍事行動を容認したとは想定しがたいとして、碑文の年代をプトレマイオス朝による支配が始まる直前の前四世紀後半に引き上げる。Laronde, op. cit., pp. 52-53. Fraser, P. M. Inscriptions from Cyrene, *Berytus*, 12 (1958), p. 110, n. 5. Fraser, A Lexicon, p. 315f. Μνάσαρχος, no. 4 においても前四世紀説が採用されている。

(9)　Paus. 6. 12. 7. Moretti, L. Olympionikai. *MAL*. 8ser. 8-2 (1957), p. 122, no. 428; p. 133, no. 508. Laronde, Fraser は祖父と孫を共に前四世紀におく。cf. Laronde, op. cit., pp. 53-54. Fraser, A Lexicon, p. 223f. Θεύχρηστος, no. 6; 15.

(10)　SEG. 9. 50. 1. 39; SEG. 9. 1. 1. 74. Fraser, A Lexicon, p. 177, Εὐκλῆς, no. 10. Laronde, op. cit., pp. 56-57.

(11)　Supplemento. 127. Laronde, op. cit., p. 54. ただし、Fraser は碑の年代を前四世紀におき、この人物をスパラテゴスと同一人とみなしている。Fraser, A Lexicon, p. 315f. Μνάσαρχος, no. 4.

(12)　Cassels, J. The Cemeteries of Cyrene. *PBSR* 23 (1955), p. 25, fig. 4; p, 28, no. 171. Beschi, L. Divinità funerarie cirenaiche. *ASAA* 47-48 (1969-70), pp. 168-186.

(13)　Beschi, loc. cit. et fig. 34. Laronde, op. cit., p. 54-55. このタイプの墳墓は、キュレネにおいてクニドス期を中心に多数の事例が観察されている。Tomlinson, R. A. False-facade Tombs at Cyrene. *ABS A* 62 (1967), pp. 241-256.

(14)　CIG. 5162. Laronde, op. cit., p. 55. Beschi, op. cit., p. 183. Fraser, A Lexicon, p. 223f. Θεύχρηστος, no. 1.

(15)　SEG. 9. 230; 228; 227; 229. Fraser, A Lexicon, p. 177, Εὐκλῆς, no. 8; p. 223f. Θεύχρηστος, no. 17; p. Laronde, op. cit., p. 56.

(16)　SEG. 9. 1. 1. 75. Fraser, A Lexicon, p. 248, Κάλλις no. 6. SEG. 9. 45. 1. 14. Fraser, A Lexicon, p. 264, Κλευγένης, no. 3.

(17)　SEG. 9. 49. 1. 19. Fraser, A Fexicon, p. 223, Θεύχρηστος, no. 11. SEG. 9.49. 1. 21. Fraser, A Lexicon, p. 252, Κάρνις, no. 7. SEG. 9. 50. 1. 50. Fraser, A Lexicon, p. 112, Δαιλέων, no. 2. Schwyzer. 234. 1. 12. Fraser, A Lexicon, p. 385, Πρᾶξις, no. 5. SEG. 9. 46. 1. 9. Fraser, A Lexicon, p. 223, Θεύχρηστος, no. 15. SEG. 9. 27. Fraser, A Lexicon, p. 223, Θεύχρηστος, no. 6.

(18)　Hdt. 4. 160.

(19)　id., 7. 71; 86.

(20)　D. S. 18. 19. 2-3; 21. 1-4. Laronde, op. cit., p. 71. 前四世紀後半以降、ギリシア人傭兵の装備は全般的に軽量化する傾向がみられた。Snodgrass, A. M. *Arms and Armour of the Greeks*. London 1967, pp. 124-126.

(21)　投槍兵の隊長、四頭立て戦車隊と共に戦うペルタスタイの隊長、戦車搭乗戦闘員の隊長の三つの軍事的公職は、Stucchi によってゼウス神殿において発見された未刊行の軍事的公職者名簿に現れる。Laronde, op. cit., p. 132f.

(22)　Hsch. s. v. τριακάτιοι.

(23)　Hdt. 7. 158（シラクサ）、X. HG. 7. 5. 23（スペルタ）、D. S. 15. 85. 4（アテナイ）。

(24)　D. S. 20. 41. 1.

(25)　id. 18. 19. 4; 20. 41. 1. cf. Laronde, op. cit., pp. 42-44.

(26)　X. Chr. 6. 1. 27.

(27)　ミュケーナイ時代のギリシアにおいて、ホメロスが描いたような戦車の運用法が実際に行われていたかどうかについては議論がある。藤縄謙三、

「ホメロスと戦車」『西洋古典学研究』九巻、一九六一年、二四～二五頁。Anderson, J. K. Homeric, British and Cyrenaic Chariots. *AJA* 69 (1965), pp. 351-352.

(28) Aen. Tact. 16. 14-15.

(29) id. 16. 14. *Κυρηναίους δὲ καί Βαρκαίους λέγεται καὶ ἄλλας τινὰς πόλεις τὰς ἁμαξηλάτους τε ὁδοὺς καὶ μακρὰς βοηθείας ἐπὶ συνωρίδων καὶ ζευγῶν βοηθεῖν.* (キュレネ人とバルカ人とその他幾つかのポリスは、車両の通行できる長距離の道路を、二頭立てと四頭立ての戦車に乗って救援に赴くという)

(30) Goodchild, R. G. Mapping Roman Libya. *Geographical Journal* (1952), p. 149. id., The Roman Roads of Libya and their Milestones. In *Libya in History*, Benghazi 1968, p. 157. 現在確認される古代の道路の多くはローマ期のものだが、これらのローマ道は基本的に既存の道路網を継承したとみられている。したがって、キュレナイカの道路網はプレ・ローマ期にはほぼ完成していたと思われる。

(31) cf. Stucchi, op. cit., p. 95, n. 3.

(32) X. Cyr. 6. 1. 28. *ὄντων τῶν βελτίστων ἐπὶ τοῖς ἅρμασι* (戦車には最も屈強な者たちが乗り組んだので)

(33) Schwyzer. 234. 1. 11. Fraser, A Lexicon, p. 414, *Στράτων*, no. 9. SEG. 9. 49. 1. 21. Fraser, A Lexicon, p. 252, *Κάρνις*, no. 7.

(34) SEG. 9. 46. 1. 30. Fraser, A Lexicon, p. 76, *'Αριστοφάνης*, no. 2.

(35) SEG. 9. 46. 1. 4. Fraser, A Lexicon, p. 360, *Παραιβάτας*, no. 8. SEG. 9. 1. 1. 74. Fraser, A Lexicon, p. 375, *Πολιάνθης*, no. 8. Laronde, op. cit., p. 107.

(36) SEG. 9. 13. Fraser, A Lexicon, p. 177, *Εὐκλείδας*, no. 4. Laronde, op. cit., p. 106.

(37) Schwyzer. 234. 1. 16. Fraser, A Lexicon, p. 76, *'Αριστοφάνης*, no. 4. SEG. 9. 89=Supplemento. 132b. Fraser, A Lexicon, p. 76, *'Αριστοφάνης*, no. 6.

(38) Ael. VH. 10. 2. D. S. 13. 68. 1. X. HG. 1. 2. 1. Paus. 6. 8. 3. Moretti, op. cit., p. 110, no. 347; p. 121, no. 421. SEG. 9. 50. 1. 25.

(39) Masson, (1976), p. 53. Fraser, A Lexicon, p, 42.

(40) D. L. 3. 19-20.

(41) Ael. VH. 2. 27. Moretti, op. cit., pp. 179-180. no. 990. ただしFraserは留保つきながら両者を区別している。Fraser, A Lexicon, p. 76, *'Αννίκερις*, no. 2; 3.

(42) RE. s. v. Platon, col. 2349. Laronde, op. cit., pp. 12-13.

(43) SEG. 9. 147. Oliverio, G. *Africa Italiana*, 3, 1930, p. 144, no. 1. Stucchi, op. cit., p. 65. Laronde, op. cit., pp. 109-110.

(44) Fraser, A Lexicon, p. 246, *Καλλίμαχος*, no. 10. Laronde, op. cit., p. 112.

(45) Chamoux, 1953, p. 308f.

(46) id., 1953, p. 375.

(47) Laronde, op. cit., pp. 111-112.

(48) Fraser, A Lexicon, p. 367. *Πειθαγόρας*, no. 10.

(49) SEG. 9. 46. 1. 21. Fraser, A Lexicon, p. 472, *Φίλων*, no. 46.

(50) SEG. 9. 76. 1. 1=SGDI. 4835. 1. 1. Fraser, A Lexicon, p. 472, *Φίλων*, no. 47.

(51) SEG. 9. 1. 1. 81. Fraser, A Lexicon, p. 472, *Φίλων*, no. 54.

(52) Supplemento. 161-162. Fraser, A Lexicon, p. 472, *Φίλων*, no. 69.

(53) Fraser, A Lexicon, p. 42, *'Αννίκερις*, no. 7.

(54) Fraser, A Lexicon, p. 247, *Καλλίππος*, no. 17; p. 221, *Θεύδωρος*, no. 11.

(55) キュレネ領の西に隣接するリビア系集団バカレスから派生したとみ

られる。Masson, (1976), p. 59. Fraser, A Lexicon, p. 98. Gasperini, op. cit., pp. 412-413.

(56) SEG. 9. 1. 1. 81.

(57) Supplemento. 59. Fraser, A Lexicon, p. 98. Βάκαλ, no. 3.

(58) Supplemento. 176. Stucchi, loc. cit. Fraser, A Lexicon, p. 36, 'Ανάξεας, no. 1. Fraser は、この碑文の年代推定を留保している。しかし、サンプルが二例のみという、アナクセアスという名の稀少性からみて、Stucchi の同定は支持できる。

(59) SEG. 9. 1. 1. 87. Fraser, A Lexicon, p. 278, Κύδιμαχος, no. 2.

(60) SEG. 20. 729. Supplemento. 246. Fraser. A Lexicon, p. 18, Αἰγλάνωρ, no. 12.

(61) SEG. 9. 89=Supplemento. 132b. Fraser, A Lexicon, p. 64, "Αριστις, no. 16.

(62) Stucchi によって新たに発見された SEG. 9. 50 の軍事的公職者名簿の未刊行の後半部分 11. 82; 109.Lazzarini, M. L. Libyi nell'esercito di Cirene. *QAL*12 (1987), p. 172.

(63) SEG. 9.49. 11. 17-18. Fraser, A Lexicon, p. 221, Θεύδωρος, no. 6; 7.

(64) SEG. 9. 1. 1. 77=SEG. 18. 726. Fraser, A Lexicon, p. 58 'Αρίμμας, no. 4.

(65) SEG. 9. 11. Masson, (1976), p. 60. Fraser, A Lexicon, p. 429, Τάβαλβις, no. 1.

(66) Masson, O. Remarques sur deux inscriptions de Cyrène et de Théra. *Revue de Philologie* 41-2 (1967), pp. 227-228. Masson, (1976), p. 59. Fraser, A Lexicon, p. 403, Σέμηρ, no. 1.

(67) SEG. 9. 46. 1. 59. Fraser, A Lexicon, p. 17. Αἰαμονάν, no. 1.

(68) SEG. 9. 50. 1. 123. Γιλων はリビア名 Γιλδαν または Γιλδω がギリシア語化された形態とみられる。Lazzarini, loc. cit.

(69) Laronde, op. cit., pp. 339-340. Reynolds. J. Libyans and Greeks in Rural Cyrenaica. *QAL*12 (1987), pp. 379-380.

(70) 具体例としては、自身からさかのぼること八代にわたる家譜を墓碑に刻した、クレアルコスという人物のケースが挙げられる。この家譜の初代はバットス、二代目にはアラゼイルというリビア名がみられる。Masson は字体を根拠に碑の年代を後一～二世紀と推定し、クレアルコスの祖先とされるバットスという名は、バットス朝との実際の血縁関係を示すものではなく、単に家族の血統の高貴さのシンボルに過ぎないと考える。CIG. 5147=SGDI. 4859. Masson. O. L'inscription généaologique de Cyrène (SGDI 4859). *BCH* 98 (1974), pp. 266; 269-270. この推定は、前六世紀のバルカ王の名として知られるアラゼイルに関しても該当するであろう。Hdt. 4. 164.

(71) 金澤良樹氏は、プトレマイオス朝下の状況として、エジプト人がギリシア名を名乗ることが広く見られた現象であるのに対して、その逆は稀であったと想定される。金澤良樹「ラゴス朝後期のギリシア人とエジプト人」『アジア諸民族における社会と文化（岡本敬二先生退官記念論集）』国書刊行会、一九八四年、五八三頁。

(72) Gasperini, op. cit., pp. 406-407.

(73) SEG. 9. 1. 11. 1-3. Fraser, (1958), p. 122f. この箇所に現れる τῶν Λιβσσῶν という語に関する最も自然な解釈は、それを上記の領域内に住むリビア系諸部族に属する女性とみなすことであり、現在にいたるまで広く受け入れられてきた。Ferri, S. Alcune iscrizioni di Cirene. *Abhandlungen der preussischen Akadimie der Wissenschaften* (*philosophisch-historische Klasse*) 1925, p. 15. Taeger, F. Zum Verfassungsdiagramm von Kyrene. *Hermes* 64 (1929), SS. 438-440. Kwapong, A. A. Citizenship and Democracy in Fourth-Century Cyrene. In *Africa in Classical Antiquity*, eds. L. A. Thompson and J. Fergson. Ibadan 1969, pp. 108-109. Applebaum, op.

cit., p. 104. Laronde, op. cit., pp. 250-251. この語がキュレネ以外の植民市出身の女性を含んでいた可能性も完全には否定できないが、それがギリシア系植民市出身者のみを指し、リビア人女性を含まないとするMorettiの理解は支持しがたい。Morettiの解釈では、ギリシア系植民市が集中するキュレナイカ西部はとりわけ、植民市の存在しないキュレネ以東のマルマリカ地方がキュレネ人の通婚圏に含まれている理由が説明できないからである。Moretti, L. *RPAA*. 60 (1987/8), pp. 237-241 (筆者未見) cf. SEG. 38, 1988, no. 1881.

(74) Paus. 6. 12. 7.

(75) アイグラノールに関する史料は前掲注六〇参照。彼の活動年代については Hauben, H. and E. Van't Dack. A propos de quelques inscriptions de la Cyrénaïque. *ZPE* 8 (1971), pp. 33-39. Laronde, A. La Cyrénaïque romaine, des origines à la fin des Sévères. *Aufsteig und Niedergang des Römischen Welt* 10-1 (1988), pp. 1009: 1010. 彼がアレタフィラーの父親とみられることについては Habicht, C. Beiträge zur Prosopographie der altgriechischen Welt. *Chiron* 2 (1972), SS. 127-129.

(76) Plu. Moralia. 255e.

(77) id., Moralia. 257a. Masson, (1976), p. 53.

(78) id., loc. cit.

(79) id., Moralia. 257b.

(80) SEG. 9. 7. 1. 20. Chamoux, F. Epigramme de Cyrène en l'honneur du roi Magas. *BCH* 82 (1958), pp. 571-587. Bengtson, H. *Die Strategie in der hellenistischen Zeit*. 2 ed., Vol. 3. München 1967, S. 154.

(81) Camps, G. Le cheval et le char dans la prehistoire nord-africaine et saharienne. *Melanges Edouard Delebecque* (1983), pp. 49-51. id., Les chars sahariens: images d'une société aristocratique. *AntAfr* 25 (1989), pp. 30-32.

(82) Lhote, H. *La découverte des fresques du Tassili*. Paris 1958 (H. ロート、永戸多喜雄訳『タッシリ遺跡―サハラ砂漠の秘境―』毎日新聞社、一九六〇年)

(83) Camps, (1989), p. 13.

(84) id., (1989), p. 29.

(85) Spruytte, J. *Etudes expérimentales sur l'attelage*. Paris 1977, pp. 25-28, Pl. 2 et 6; pp. 57-61, Pl. 12-14. cf. 加茂義一『騎行・車行の歴史』法政大学出版局、一九八〇年、二四～二五、二八頁。

(86) Spruytte, op. cit., p. 77-99, Pl. 20-26.

(87) id., op. cit., p. 99. Camps, (1989), pp. 21-22.

(88) Camps, (1989), pp. 26-27.

(89) Bates, O. *The Eastern Libyans*. London 1914, pp. 149-150. O'Connor, D. New Kingdom and Third Intermediate Period, 1559-664 BC. In *Ancient Egypt; A Social History*, eds. Trigger B. G., B. J. Kemp, D. O'Connor, and A. B. Lloyd. Cambridge 1983, p. 276.

(90) Camps, (1989), p. 33.

(91) Hdt. 4. 170.

(92) id., 4. 180 (アウセイス); 183 (ガラマンテス); 193 (ザウエケス)

(93) id., 7. 86.

(94) D. S. 20. 38. 1; 64. 3.

(95) Daniels, C. *The Garamantes of Southern Libya*. Cambridge 1970, pp. 12-13. Camps, (1983), p. 53.

(96) Spruytte, op. cit., p. 91. Camps, (1989), pp. 37-39.

(97) Camps, (1989), pp. 36-40.

(98) Str. 17. 3. 19.

(99) Mattingly, D. J. *Tripolitania*. London 1995, pp. 40-41.

(100) D. S. 3. 45. Chamoux, F. Diodore de Sicile et la Libye. *QAL* 12 (1987), pp. 61-63. Mattingly, op. cit., p. 25.

(101) Arr, FGrH. fg. 9. 17.

(102) Hdt. 4. 189.

(103) Paus. 5. 8. 7. Chamoux, 1953, p. 235, n. 5.

(104) Kunz, J. Felsbilder der westlichen Tassili-n-Ajjer (Algerien). *Beiträge zur allgemeinen und vergleichenden Archäologie* 1 (1979), S. 215, no. 18, 9. et Tafel. 15. 1.

(105) Müller-Karpe, A. Eine Quadiga-Darstellung in der Zentral-Sahara. *Beiträge zur allgemeinen und vergleichenden Archäologie* 2 (1980), SS. 369-370. Stucchi は、この戦車図を根拠に、quadriga の使用はキュレナイカのギリシア系植民市から周辺のリビア系住民に伝播したのではないかと推定した。しかし、この事例が孤立していて現在のところ類例が知られていないこと、ヘロドトスがキュレナイカを訪れた前五世紀半ばの段階で、quadriga の使用が、キュレネに隣接するアスビュスタイのみならず、フェザンの内陸深く隔たったガラマンテスをはじめとするリビア系諸族の間に広範に普及し、すでに独自の発達をとげていたこと、およびベルベル社会におけるウマと戦車の利用の長い伝統を考えると、Stucchi の見解にただちに賛同することはできない。現段階では、ギリシア系植民市からの表現様式上の影響を示すにとどまるものとみなすべきではないだろうか。Stucci, S. Problems Concerning the Coming of the Greeks to Cyrenaica and the Relations with their Neighbours. *Meditarch* 2 (1989), pp. 78; 83. アスビュスタイは「四頭立て戦車の乗り手としてはリビア人中最高 (*τεθριποβάται δὲ οὐκ ἥκιστα ἀλλὰ μάλιστα Λιβύων εἰσί*)」であったとされる。Hdt. 4. 170. この箇所は、quadriga が当時アスビュスタイ以外のリビア人によっても一般的に使用されていたことを暗示する。Camps, (1989), pp. 27-28.

(106) Vallet, G. La cité et son territoire dans les colonies grecques d'Occident. *La città e il suo territorio, Atti VII Convégno Studi Magna Grecia*, Taranto 1967, Naples 1968, 1970, pp. 103; 104. シドニーで開催された、ギリシア人植民者と先住民との相互関係をテーマとする一九八五年のシンポジウムでは、外来文化と土着文化との接触と融合の中から新たな文化の創成をうかがおうという方向性が打ち出されているが、このプロセスにおいて特に後者が前者に与えた影響が重視される。Descoeudres, J. P. Introduction. In *Greek Colonists and Native Populations*, ed. J. P. Descoeudres. Oxford 1990, p. 3. 黒海沿岸の植民市世界に関する篠崎三男氏の一連の研究もまた、このような潮流の中に位置づけることができる。篠崎三男「黒海北岸のギリシア世界」弓削達・伊藤貞夫編『ギリシアとローマ・古典古代の比較史的考察』河出書房新社、一九八八年、四九五―五一九頁。同「紀元前四世紀のボスポロス王国―「プロト・ヘレニズム国家」におけるギリシア人と土着住民との相互関係―」『バルカン・小アジア研究』一六巻、一九九〇年、一～二五頁。

(107) Graham, A. J. The Colonial Expansion of Greece. In *The Cambridge Ancient History*, eds. J. Boardman and N. G. L. Hammond. 2ed., Vol. 3. Cambridge 1982, pp. 156-157. Chamoux, 1953, p. 224.